東方学院だより

TOHOGAKUIN NewS

1991

No. 2

東方学院だより
TOHOGAKUIN NewS No.2 1991

CONTENTS

INTERVIEW
中村元学院長に聞く——宗教について
聞き手　奥田　洋子……2

A GUEST FROM U.S.S.R.
ロシアにおける仏教研究の現状
ボンガルト・レーヴィン……6

LECTURES
講座紹介
関西（苅谷定彦教室）
「法華経の世界」……山内胤博……8
東京（西村公朝・西山多寿子教室）
「仏像彫刻実技」……渡邊了恵……9

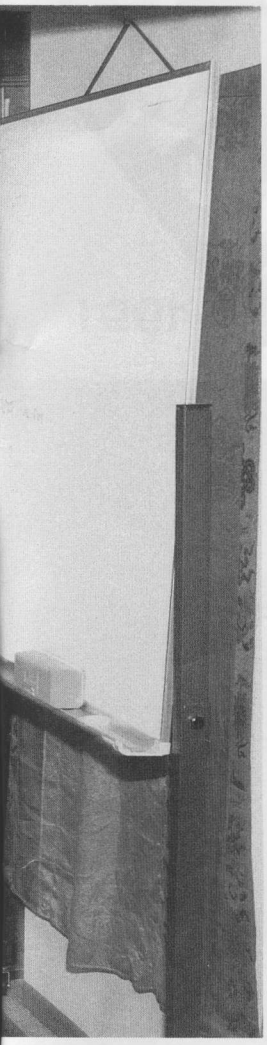
READERS' COLUMN
老いこそ勉強のとき……山下武利……10

STUDENT'S' MESSAGE
学院のひろば……11

INFORMATION
事務局から……12

表紙写真＝パキスタン・中国国境付近にて、法顕三蔵が通ったといわれるシルクロード旧道（断崖中央筋状）を望む。（撮影・山本文溪氏）

発行日　1991年11月20日（不定期発行）
発　行　東方研究会事務局
〒101 東京都千代田区外神田2-17-2
☎03-3251-4081㈹　Fax03-3251-4082
郵便振替　東京２-105515
編　集　編集委員会



——昨今、宗教の絡んだ問題が人類にとって重大な問題となっています。そこで今回は宗教の意味についてお伺いしたいと思うのですが——

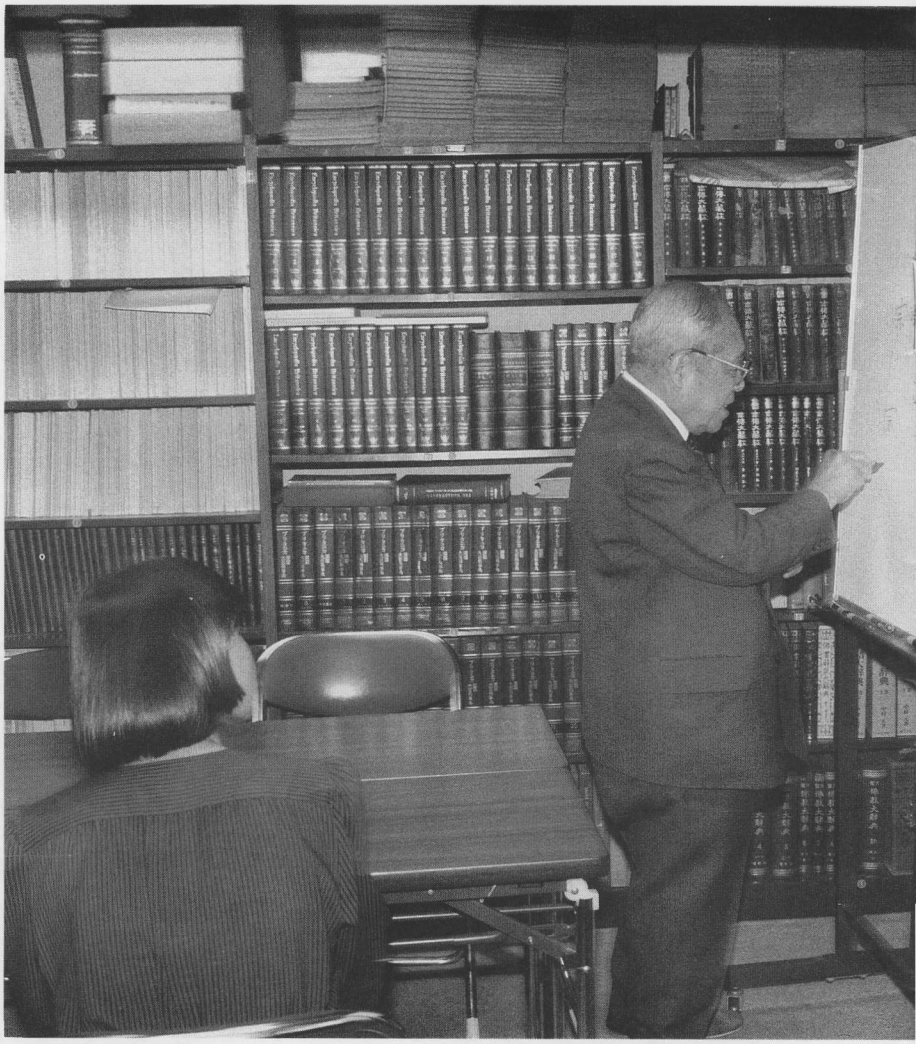
宗教というのは英語のreligionという言葉の訳だということはどなたでもご承知ですね。これはラテン語のreligioからきているわけですが、宗教学者によると語源を詮索してもあまり意味がないそうです。ではなぜreligionという言葉を宗教と訳したかと言いますと、明治になってreligionの観念が入ってきたとき、何か漢字をあてなきゃ翻訳にならないというんで、当時の知識人が苦労して「宗教」という字をあてたんです。その語源につきましては、禅の書物に出てくるんですよ。明治14年に出しました『哲学字彙』という本の第三版に、宗教というのは『宗鏡録』という本に出てくるということが書いてあるんです。だから宗教というのはこの『宗鏡録』という本を念頭においた訳だったんですね。これは宋代の書物で百巻あるんですが、そこに出ている説明によりますとね、宗教というの

宗教について

⊙中村元学院長に聞く⊙

INTERVIEW

哲学者・仏教学者はとかく社会問題とかけ離れた存在と見られている風潮があるので、時の問題をとりあげて、毎回インタビューをします。



学院長室で白板を使ってわかりやすく答えられる中村先生

は「もとのもの、人間存在の基づくもの」なんですね。つまり、人間はどこから現れ出てどこに消えて行くのか、これはわからないわけですね。

そのもとのもの、それを仮に「宗（しゅう）」と呼んでいるんです。ただし、それは不可説、つまり言葉で説くことができない。けどなんとかして説こうとすると言葉に頼ることになる。そこで教えが成りたつわけです。

この「宗」の語源ですが、屋根（宀）の下にテーブルがあるんですね（示）。そのテーブルの上に犠牲の獣が置かれる（宗）。そこで犠牲の獣の血が流れてくる（宗）。こういう語源なんだそうですが、仏教に取り入れられるとそういう連想はなくなり、「もとのもの、人間の基づくもの」、すなわち祖先を意味するようになる。それから祖霊、すなわち祖先の霊魂を意味するようになるのです。『楞伽（りょうが）（ランカーヴァターラ）経』というお経によりますと、この「宗」は、究極のぎりぎりの教えという意味です。その教えを説くと「教」になる。もとのものは言葉では言い表せない。けれどなんとか人に理解させようとする。そこで、もとのものは月みたいなもんで、教えっていうのは月をさす

指だっていうんです。そこには仏教的な理解が出ているわけですね。月には到達できないんだけど、月はあっちにあるよ、あんなものだよ、とあっちからもこっちからも指さす。これを現代の場面に移しますとね、世界にあるいろんな宗教ってものは、「そのものとのもの、書き表すことのできない霊妙なもの」をさし示して説いているわけです。そう理解しますとね、別に宗教の争いはなくなるわけです。ところがその教え方にこだわると、それぞれ違うわけですから、果てはドグマとドグマの争いが起きる。ドグマというのは人を導くための縁、手だてだと思えば争いも起きないわけでしょう。この教えを信じなきゃいかんというから争いが起きる。そこで今後の世界平和、世界全体にわたる諸民族諸宗教の「和」を具現するためには、そういう見方が必要じゃないかと思われるんです。お互いに相互理解を持てば、争いというものはなくなると思いますがね。で、だんだんと世の中はそっちへ向かっているんじゃないですか。

――どうすればそのような見方を身につけることができるでしょうか――

教えというものの相対的意義を理解するということになると思いますね。一つの教えが絶対だと解すると無理があるわけですね。

例えば一つの宗教が一つのドグマを立てたとします。他の宗教の信者には受け入れられないってものがありますね。その場合に、「あの人々は歴史的にああいう伝統があるからこれを受け伝えて尊んでいるんだ」と、広い気持ちで、「自分は同調できないけれども、あの人々はああいう気持ちで教義を尊んでいるんだ」というような広い態度で理解すれば、自ずから争いというものはなくなると思います。その為には個々の教義を相対化することになると思いますが、それは仕方ないと思います。絶対のものは言葉をこえたところにあると考える傾向は、東洋ばかりじゃなくて西洋にだってあるわけですね。例えば、西洋でも神秘主義者の間には、絶対の神というものは言葉では言い表せないものであり、神とさえも言い表せないものだという考え方がありますね。こういう考え方を持っている人は争わない。キリスト教ではクエーカーが、またイスラム教ではスーフィーが、このような教義にとらわれない立場を取っていますね。

――教義にとらわれないとは、言葉にとらわれないということですね――

そういうことになりますね。言葉というものは結局「方便だ、手だてだ」ということになりますね。

――では、その言葉では言い表せないものを仮に言葉で言い表すとしたら――

これはですね、人間の内なる暖かな心と言いますかね、これもまた、表現が難しくて、いろいろな表現が可能だと思うんですよ。愛という言葉で言い表す人もいますね。慈悲という言葉で言い表す人もいますね。暖かな、柔軟な、思いやりのある心。こういうものは、どの宗教にもあるんですよ。そして宗教を尊ぶべき所以はそこに帰着するんではないでしょうか。

――どの宗教にも共通して暖かな心があることを認識するためには、お互いの方便や手だてもある程度知ることが必要かも知れませんね――

暖かい理解を持つということが必要でしょうね。

――聞くところによりますと、例えばドイツでは、世界のいろいろな宗教思想を公立高校で教えるそうですね。その点日本では

歴史的な背景しか教えていないように思われるのですが――

そのとおりですね。ある面ではドイツと日本はよく似ているんです。似ているというのは、両国とも、旧来の大国に反抗して果ては戦争まで起こしましたね。それから、負けたけれども今日では世界経済の復興力になっているでしょう。それなのに在り方が非常に違う。ドイツ人は自分達の精神的伝統に絶大なる自信を持っているわけですよ。自分達の哲学が西洋哲学のもとだという。ところが、日本の指導者は自信を持っていない。だからこの間も哲学のあるのないので実業家と政治家との間でもめましたね。けど、そんなことを問題にされるってこと自体が問題ですよね。ドイツでは憲法で、学校でも宗教教育を行うことになっているんです。ところが日本はそうじゃなくて、宗教を教育から除くということになっているのです。これは以前国家神道が国家主義に発展したという歴史的背景とも関連があるかも知れませんが、ドイツと日本はこのような点が違うわけですね。けれども、その結果ですね、ドイツの指導者は自信を持っているけれども、日本の指導者は自信を持っていないという、この違いは出てきたわけなんですね。ここにやはり考えるべきことがあると思いますね。

――では、これまでの日本の歴史の中に、私たちがこれから手本としていけるような思想家、宗教家、もしくは政治家が具体的にいらしたのでしょうか――

それはいたと思いますね。ただそれを今の時代にそのまま持ち出してくるのは時代錯誤ですが。社会が変わっているのだから。

やはり我々の理解に従ってですね、自分としてはこう進むべきだ、こうあるべきだということをとらえて、銘々の方が努力されたらいいと思うんですね。そうしたら自(おの)ずからしかるべきところに落ち着くでしょう。

――ひとりひとりが自分なりの努力で理解しようと努め、かつお互いをも理解しようと努めると、そこに何かしら共通のものが見えてくるのですね――

諸宗教が現にあるけれども、つきつめて考えると、何かその底に普遍的なものがある。それをめざせばいいわけですね。それは我々の理解力では充分にとらえられないかもしれない。人間の理解力というものは所詮(しょせん)限られたものですからね。これは仕方がないと思いますよ。ただもとなるものをめざして努めればよいと私は思っておりますが。

――そうすれば「和」が具現されるのですね。先生は先程「だんだん世の中はそっちへ向かっているんじゃないか」とおっしゃいましたが、世界宗教者会議が日本でも開かれているのはそのあらわれと考えてよろしいのでしょうか――

それは歴史的な必然性に応じて出てきたと思いますね。ただ理論的に基礎づけられていないと思うんですよ。だからさっき私が言ったような「宗」と「教」とかですね、そういうようなことを説かれる方があまりおられないんじゃないですか。で、今それを求めている。それで、今度鎌倉の鶴岡八幡宮で、東方学院の夏期宗教講座を開催することになったわけです。

――先生は「宗教の意義」という題でお話しくださるのでしたね。ぜひ多くの方々に参加して頂きたいと思います。今日はお忙しいところを、貴重なお話を伺わせて頂きまして本当にありがとうございました――

（聞き手、奥田洋子＝受講生）

A GUEST FROM U.S.S.R.

ロシアにおける仏教研究の現状

ボンガルト・レーヴィン博士（ソ連アカデミー会員）
Prof. Bongard Levin

私はサンスクリット語を専門としておりますロシア人の学者です。そのロシア人の学者がなぜ日本に来たかと不思議に思われるのではないでしょうか。中にはインドとかスリランカへ行って、そちらのサンスクリットの専門家に協力を求めたらどうかと思われるかもしれませんが、これから、なぜ日本に来たかを述べたいと思います。

その前に簡単にソ連における仏教学の発展の歴史を述べたいと思います。というのも、なぜ私が日本に来るかの大義がここにあるからです。

仏教はインドに始まったのですが、西洋の学者が仏教に遭遇したのは十九世紀の初頭の頃です。以後フランス・イギリス・ドイツの諸学者が仏教の研究をはじめたわけです。当時は、パーリ語の経典のみが仏教の真髄を伝えている経典であるという考え方を持っておりました。パーリ語の経典というのは古いもので編纂されたのがだいたい紀元前三世紀頃だといわれております。この経典群にヨーロッパの学者が接して、南伝仏教パーリ至上主義が大成しました。その代表的存在がパーリテキスト協会のリス・デービス先生です。彼はいろんなテキストを編纂しただけでなく、それを出版するためのパーリテキスト協会を設立しました。彼に代表される先生方は「お釈迦様の真説が、パーリ語文献のなかに残されているんだ。上座部の仏教のみが仏教のオリジナルな形だ」と考えていました。これらの先生方は「サンスクリット語による経典は、仏教の単なる変化したもの」としてとらえるだけではなく、それ以上に誤った仏教であるというふうに断言することがあります。

しかし、その後大乗仏教の研究も盛んになります。そのきっかけを創ったのが、ロシア人の有名な仏教学者ミナエル教授、オルデンベルグ教授、シュチュルバスキー教授らです。彼らはパーリ語経典重視の風潮の中で「大乗仏教も研究しなければ仏教は解らないのではないか」という立場で、新しい仏教研究の流れを創りました。この先生方は『ディルリオディカル・ブディカ』という仏教聖典シリーズを、レニングラードから出版しました。この作業には、ドイツ・フランス・英国だけでなく日本の荻原雲来教授も参加されました。このシリーズの出版目的はサンスクリット語の聖典の刊行だけでなく、チベット語・中国語などの翻訳などが、網羅されています。

これは、カシミールから出土したもの以外、インドにはサンスクリット語の古い文献がほとんど残っていないという不幸な事情から、その翻訳であるチベット語や中国語あるいは、モンゴル・ウイグル語といった翻訳ものが重要となっているという現実によるものです。

さて、このサンスクリット語の原典を探すのに当たって、一番有効であったのがロシア、フランス、英国、日本などが派遣した東トルキスタン探検隊でした。ロシアの探検隊を指

揮したのが、先程申し上げたオルデンベルグ教授です。一九〇四年と一九一四年の二回発掘調査をしております。このオルデンベルグ教授のコレクションはレニングラードにあります。

これらの探検隊の成果がなぜ重要かといいますと、この地域は昔インド人の植民地であり、仏教教徒であったインド人がたくさんのサンスクリット語の原典を持っていました。そしてそれが、乾燥したこの地域特有の自然環境のために、よく残されているのです。その発掘品の中に、今回私が日本に来ることの原因となった断片も含まれています。

さて、これらの断片は当然のことですが、すべてブラフミー文字で書かれています。このブラフミー文字は、東アジアのほとんどの国の文字の元になったものです。大変解読するのが難しいものですが、訳すことはなんとかできるのです。しかし、その断片が何というお経のどの部分か、ということを判別することは非常に難しいのです。一千回読んでも解らないことがあります。良い例は、朝日新聞全体から小さな一辺を切り取り、それが何年何月何日のどういう記事かを判別するようなものです。この作業の難しさをご理解いただけることでしょう。

ところが、日本では事情が少し違うのです。日本では大乗仏教が実際生きており、それを信仰しているという現実があります。例えば、中村先生は大乗仏典のほとんどすべての内容をわきまえておられます。したがって、私が断片をお見せしただけで、如何なる経典のどういう部分かをたちどころに理解される。少なくとも、誰にそれを見せれば、その経典の内容や経典名が解る可能性が高いかを即座にご理解される。

これは前回一九八六年に日本に来た時の話です。私が、般若経系のテキストを出版するために読んでいた断片がありました。その経典の翻訳はすぐできたのですが、何という経典であるのかが解りませんでした。そこで京都の大学の松田さんという若い方にその話をいたしました。すると彼は三日ほどして、それが『マハー・アバタナーシー』の一節ではないかと、その内容から推測してくれたのです。ここで、私が仮に日本の有名な詩人の詩を一、二行読めば、皆さんその詩がだれの作品であるか直ぐにおわかりになるのではないでしょうか。同様なことが、大乗仏教が生きている日本の仏教学者にいえるのです。日本の学者には大乗仏教の精神というか、哲学が備わっているところがあります。私が今回日本にやって来た目的は、あるサンスクリット断片が、如何なる経典の一部であるかを見付けるため、日本の学者の協力を得ることにありました。

最後に、ロシアの仏教事情を紹介しましょう。

ソ連に仏教がはいってきたのは十七世紀、チベット経由でした。ブリアティアは、バイカル湖近くにあるのですが、今日でもこの辺りには、五万人の信者と百人程のラマ僧が住んでいます。また、モンゴリアには仏教徒の大学があり、教授が派遣されることになっています。ここでは仏教のお祭りがあり、モンゴル語の聖典もあります。またブリアティアのラマ僧たちは、チベット語を解します。一九一四年にシブラツキ教授はレニングラードに仏教寺院を建てました。長年閉鎖されておりましたが、今ではお寺も再開され、モスクワにも仏教徒の組織ができつつあります。そして仏教聖典をロシア語に翻訳する作業も進行中です。その中には、『法句経』などの聖典のみならず、龍樹や世親などの専門書も含まれています。

さて、今日のソ連領である中央アジアには、クシャーン朝時代の紀元二世紀ころ仏教は伝わりました。そのことは発掘調査によって明らかとなるのです。それによりますと主に二―七世紀の地層から仏教に関する資料が出てきます。中には、ブラフミー文字の他にソフリア語で書かれたものもあります。この地方に仏教は、バクトリア経由で入ったということが中国の資料から明らかになります。

（東方学院大手町教室での講演の抜粋です）

講座紹介

LECTURES

関西

苅谷　定彦先生

●法華経の世界

この講座は、関西教室開講当初（昭和五十九年）の二年間ほど、唯一の教室であった。当初は大阪曽根崎の円頓寺で開かれていたがその後苅谷先生のご自坊である寝屋川市の本信寺に移され、今日に至っています。その間、受講生に多少の変動があったものの、やはり信仰の書『法華経』の講座であり、また受講生の殆どが『法華経』に魅せられた人達でもあり、その受講姿勢は真面目そのものです。

開講以来、七年目の今年二月に序品から神力品に至る第一回目の講義が完結し、その後、今春から第二回目が始まりました。

この講座は『法華経』、それもインドに生まれた初期大乗経典としての『法華経』に視点を置き、それを羅什（らじゅう）訳『妙法蓮華経』と対比、照合、時には〝神聖侵す能わざる〟『妙法蓮華経』に対して、鋭い批判を混えるユニークで興味深いものです。殊に、アカデミックな視点からの『法華経』の解説は、客観的でかつ実証的で説得力に富み、受講生に新しい目を開かせるものであります。

猶、授業後、奥様から出される茶菓子をいただきながらの談論風発も苅谷教室ならではのものです。

（受講生・山内胤博）

仏像彫刻の発表

東京

西村　公朝先生
西山多寿子先生

「仏像彫刻の実技」という厳めしい名前からどんな雰囲気を想像されるでしょうか。一受講生の眼からみた教室の様子を、若干の独断をお許し頂いて以下にご紹介いたします。

●仏像彫刻実技

この教室では仏像を彫る実技の指導は勿論のことですが、もっと遡って「仏はどこに、どんなお姿でおいでなの？」というような素朴な（でも難しい）疑問まで直接先生に質問できる、そんな教室です。換言すれば、形ある仏像の彫刻を通じて、我々の心の中にも仏を迎えることができるようにというような配慮が授業の全体を覆っているように、私には思われるのです。

授業方法は大略二通りに分かれ、その一つは入学一年目の方を対象としたものです。一年目の前半では粘土の固まりや紙面に書いた楕円形の中に潜む仏を探し求めたり、素焼きの仏像を作ったりしながら、種々の素材で仏を造形することを習います。半年位経つと古い誕生仏を手本に木彫なども始まります。ここで印象的なのは、決して頭や手足をバラバラに作って寄せ集めるのではなく、難しいことですが最初から人体を全体として把握するように指導されることです。

もう一つの方法は入学二年以上の人を対象にしたもので、一言で言えば受講生が自宅や教室で作った仏像を持ち寄って先生の指導を受けるというものです。この指導の中で我々は生涯忘れられないような場面や名言に遭遇するのです。例えば右足を一歩踏み出した十一面観音の胴から腰の部分がうまく彫れず見て頂いた時、先生が鑿を打込むと一鑿毎に観音の胴や腰がグイグイと動き出すのです。一瞬全身から血のひくような感動に襲われ、その場面は今でも生き生きと眼前に彷彿とするのです。また合掌する少女の作品を直しながら「胸から上は十六、七才だが、腰から下は七十才過ぎだね。人の体はそうバラバラに年をとらんよ」とか「自分の体に合せて彫っては仏さんが可愛想だよ」などとにこにこしながらおっしゃられます。大変重要な教えが寸毫の気取りもなくいとも簡単にポンポンと飛び出すのです。

また年一～二回ですが、上野の博物館などで古い仏像を見ながらの課外授業があります。ここでは日本彫刻の時代的特徴などの講議に加えて個々の仏像の「身の上話」なども聞くことができます。熱のこもった名講議に一般の入館者も一緒になってあっという間に半日が過ぎてしまいます。

いずれにせよ、先生の温かいお人柄に包まれて自分の仏様を彫っている、そんな教室です。その日時等は次のとおりです。

（渡邊了恵）

○四、八月を除く毎月第二土曜日、午後一時から五時まで。
○東京都文京区田端一―二五―一
与楽寺内幼稚園ホールにて
○連絡先　岩部隆明氏
（電話〇三―三七二八―〇八三七
三七二〇―六一七四）

READERS' COLUMN

老いこそ勉強のとき

山下武利
（東方研究会理事）

中村元さんは七十八歳を超えて、なおかくしゃくとして東方学院の教鞭をとっておられる。こういう人は、死ぬまで歳を取らないらしい。もし日本中の老人が、中村さんに見ならうことが出来れば、高齢者問題はたちどころに、我が国から姿を消すだろう。勿論、病気で床を離れられない人は止むをえないが、まだ十分勉強できる体力がありながら、毎日を無為に暮らしている老人も、かなりありそうに見受けられる。「私もその一人ではないか」と気づいたのは、私と同年齢の中村さんの、人を驚かすばかりの活躍をされていることのお蔭である。そこで私は、意を決してこの四月はじめから、東京農業大学の付属機関である成人学校に入学した。

成人学校は、年齢五十歳以上の希望者に、一年間、園芸のてほどきを教えるもので、私は偶然バスのなかの広告で知った。開講前に口頭試問があり、試験官はさすがに私の年齢には驚いたようだったが、まず無事に合格、四月九日に入学式があった。それから、殆ど毎日、午前十時から午後三時まで、びっしり講義がある。講義の合間には農場へでて、草刈や種付けの実習がある。私と一緒に入学した仲間は、約百名で婦人は約三分の一、男女とも私より年長の人は見当らない。

面白いことに、この学校では、生徒は必ず趣味を持つことになっており、書道、詩吟、絵画、華道、歌道、茶道の六種のうちどれか一種を選ばなければならない。私は絵画を選んだが、これには四十人以上の応募者があった。趣味の時間には、毎週火曜日の午後が当てられる。なお土曜日の午前中は、ときどき社会問題の講義がある。

まだ二カ月ばかりにしかならないが、例えば授業の始まりと終りには生徒の中の班長が、「起立」「礼」の号令をかけるなど、このごろの世間の学校よりも規律が整っていて、気持ちがいい。

そもそも園芸というものに全く知識のなかった私であるが、学校へはいったお陰で、多少の知識を修得したようだ。ことに人類のはじまる数千万年前の昔に、すでに存在していた可憐な草花の驚くべき精巧な組み立てをみると、自然の力の偉大さに思わず脱帽したくなるのである。

※　山下様は、中村元学院長と第一高等学校および東京大学の同級生で、大蔵省局長、戦後の混乱期アメリカ公使として活躍、アジア掘削㈱会長をされました。

STUDENTS' MESSAGE

学院のひろば

仏の導き

スレンドラ・サキャ（ネパール）

釈尊の生まれた国、ネパール（ルンビニ）で育った私が、どうして中村元先生のもとで、今こうして講義をうけることになったのだろう。人と人とのめぐり合わせは、とても理屈ではいえない仏よりの導きである。

三年前のことになる。中村先生のもとで、父ヘムラズ・サキャが仏教の講義をすることになり、通訳をしたことが私の人生を大きく変えることになったのである。

日本が大好きな私に、日本の文化・風俗・習慣のなかで仏教を学ぶ場を、中村先生は与えてくださった。「生きることと仏教」について、先生はご自信の生き方をとおして私に投げかけてくださったのである。

中村先生は、日本国内だけでなく、世界的にも有名な学者で、私の国でも国立大学院で講義をされたり、マヘンドラ国王よりゴルカダチンバフ賞を受けられました。私にとって中村先生は、釈尊の次に尊敬する存在になったのであります。

竹のように

しばざき　まほ

数年前の夏、鎌倉の報国寺を訪れました。

この寺は、禅宗の寺であり、竹の寺としても知られています。

山門を入ってしばらく行くと、右手に白い砂利で波紋を描いた石庭と本堂が見えます。

本堂の裏手には、一面に孟宗竹の林の明るい薄緑の世界が広がっています。

その中へと導く石畳が、一本白く浮き上がっていたのは、とても印象的でした。

竹林に一歩足を踏み入れると、今まで聞こえていた騒音は消え、閑寂な中に竹が青々と、生き生きと茂っていました。

思わず触れてみたくなって、目の前の竹に手を伸ばすと、ひんやりとした感触の後すぐに、息づくような温もりを感じました。そこで手元から視線を上げていくと、竹の葉の合い間から真っ青な夏の空が覗いていました。

空に向かってまっすぐに伸びるすがすがしい竹の姿に、心打たれ、しばらく佇んでいたのを覚えています。

この寺は以前にも一、二度訪れたことがありますが、このときほど竹の美しさに魅せられたことはありません。

『大言海』によれば竹は、「長ケ生フル義、成長ノ早キニツキテ名アルカ。又高生ノ約ト云フ」とあります。

この日以来、私は竹のようにありたいと強く心に思うようになったのです。

この感動は、五年前に東方学院に通い始めた時に受けたものと同様のものでした。そのことに気づいたのは、ごく最近のことなのですが……。

五年前。それは学生生活にも慣れた大学二年の春。自らの将来について模索していたころでした。そんな折も折、東方学院の受講の手引を手にして、そのはじめに「真に学を究め、道を求めたい人々の学院です。学歴・年齢・職業・国籍・性別などに促われません……」とあるのに深い感銘を受けました。

実際に東方学院の講義を受け始めると、年齢層の厚さに驚き、さらにここに集う人々が、皆生き生きとしているのがとてもまぶしく感じられました。

何かを求める心を持って集う人々は、すがすがしく輝いて見えます。

こちらに通うようになって、私もみなさんのようにありたいと切に思うようになりました。

この気持ちを維持し続けるためには、自分が何を求めているのか、何を求めたいと思っているのか、とことん考える必要がありました。

目標を定めるまでには、ずいぶん時間がかかりました。何よりも、「好きなこと」であるのを優先することにしてようやく、その結論を出すに到りました。それは「インド文学」でした。

この春、やっと大学院進学の思いを果たし、歩み始めることができたのも、諸先生、諸先輩、東方学院の様々な方々からたくさんのご指導やご助言を、絶え間なくいただけたおかげです。

東方学院で育まれた思いをこれからもずっと大切にして、まっすぐに、あの竹のように生きていきたいと思っています。

ここに集う人々と、報国寺でみた生き生きとした竹林の光景は、いつも私の心の中で光り輝き、重なりあっているのです。

■原稿募集

研究成果・紀行文・随想・ご意見など一二〇〇字以内でお寄せください。

INFORMATION　事務局から

■東方学院行事報告

◎夏期宗教講座

本年八月十六・十七日の両日、鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮において、「第一回鎌倉、東方学院夏期宗教講座」を、鶴ヶ岡八幡宮共催・NHK学園後援で開催されました。

一日目は、中村学院長はじめ、鶴ヶ岡八幡宮宮司白井永二先生、当学院講師下田弘先生の講演がありました。

二日目は、当学院講師三友量順・阿部慈園の両先生が、熱意あふれる講演をされました。

本講座が、神道と仏教の共同作業としてなされたことは、明治初年の廃仏毀釈以来の歴史に残る事業として、読売新聞や神奈川新聞で大きく紹介されました。

◎東方学術賞

十一月十八日、インド大使館と東方研究会との共催で「東方学術賞」の顕彰式を行いました。本年の受賞者はR・C・パンデーヤ殿（デリー大学）勝呂信静殿（立正大学教授）日野紹運殿（岐阜薬科大学助教授）田中敬一殿（二宝船舶㈱社長）の方々でした。

■新刊紹介

中村学院長著作

○『ブッダ入門』（¥一七〇〇春秋社）

○『仏弟子の生涯』（¥六五〇〇春秋社）

『ブッダ入門』は一般の方々にも、釈尊（ゴータマ・ブッダ）の生涯ならびに思想を、中村先生ならではのわかりやすさと緻密さで解説してあります。まさに「ブッダ入門」の至高の一冊といえましょう。

『仏弟子の生涯』は、中村先生のライフワークである『中村元選集』の第十三巻（第八回配本）分です。非常に高度な中村仏教学の精華の一つですが、一般の方々にもお読み頂けます。

中村学院長対談

○『釈尊の心を語る』（中村元対談集No.1）

○『東西の思想を語る』（同No.2）

○『社会と学問を語る』（同No.3）

○『日本文化を語る』（同No.4）

各一七〇〇円、東京書籍から出版されました。それぞれの分野で一流といわれる方々との対談は、中村先生ならではの蘊蓄あるお話が、随所にちりばめられております。ぜひご一読をお勧めいたします。

■賛助会員・寄付者ご芳名

（前号未掲載分、五月まで）

石井　義長殿（東京）・大石　徹元殿（東京）
金田　静江殿（東京）・木下　ミネ殿（東京）
樽林　津龍殿（東京）・小泉　宗之殿（福井）
斉藤　宏子殿（東京）・桜井　瑞彦殿（石川）
塩入　芳枝殿（東京）・常磐井慈裕殿（三重）
土公　武尚殿（埼玉）・福島洋子殿（神奈川）
藤岡　美恵殿（東京）・保坂　俊司殿（東京）
三宅　雅美殿（東京）・山本　文溪殿（東京）
吉村　高夫殿（東京）・速水印刷所殿（滋賀）

※東方研究会・東方学院の諸活動（本誌の発行も）は、賛助会費によって運営されております。また、ご寄付（懇志）もお受けいたしておりますので、どうぞご協力をお願い申し上げます。

◇賛助会費

年額一口　一万円　口数随意

郵便振替　東京二一一〇五五一五

加入者名・財団法人東方研究会